

『花陰の囚人たち』

著：沙野風結子

ill：小路龍流

「イツキ」

名前を呼ばれて、振り返る。

シートから伸び上がるようにした零飛に、下から唇を奪われた。ちろりと上唇を舐められる。

「あまり遅くならないように」

ドアが閉まり、車が走り去る。

車が信号を曲がって見えなくなってから、齋は手の甲できつく唇を拭った。

携帯電話を取り出して、記憶している十一桁の数字を打ち込んでいく——万が一、携帯電話を没収されても足がつかないように、メモリは空にしてあるのだ。

電話を耳に当てて地下鉄の駅へと歩きながら、齋は尾行の人間がいないか、あたりに注意深く視線を走らせる。

回線はすぐに通じた。鷹羽の声が耳の奥に流れ込んでくる。

フリーの時間を作れたことを齋が告げると、鷹羽は落ち合う場所を指定してきた。携帯を切ってから、すぐに発信履歴を消す。足早に地下鉄の階段を下り、齋は千代田線に乗り込んだ。

「尾けられなかったか？」

なかからドアを開けた鷹羽に尋ねられる。

「はい。それらしい人間はいませんでした」

……鷹羽の顔を見たときに情けないほど全身の力が抜けて、自覚していた以上に、この一日緊張しきって過ごしたのだと齋は知る。

シティホテルのシングルルーム、ベッドに腰を下ろして、肺の奥底から息を吐く。ネクタイを耄るように緩めた。

「亜南ならうまく潜入してくれると信じてた」

椅子に座った鷹羽が力強い、それでいて労う響きで言う。

齋は唇だけに笑みを浮かべた。

「今日は、午前中に東京証券取引所会長との会談、午後は新興企業の国際経済会議に出席して、夜は国会議員の阪井との会食でした」

「東証会長か。日本進出を本格的に考えてるってわけかな」

「そうですね。いまは日本での仕事は荻嶋組の息のかかった企業と組んでやっていますが、単独でのビジネスを考えているのかもしれませんが」

「マフィアに正面玄関から大手を振って乗り込まれるのはたまらんな」

鷹羽が苦い顔をして、瞳と同色の鳶色の髪をしっかりと指で乱暴に掻き上げる……その仕草にはちょっと真似してみたいぐらい男らしい色気があった。

——まあ、僕が真似したところで、あんなふうにはならないか。

ジャケットを脱ぎ、ネクタイも外したワイシャツにスラックス姿の鷹羽を、つついじつ

と見てしまう。

力強く張った肩やがっしりと厚みのある胸板、長くて逞しい腕。シンプルな服装だけによくわかる鍛えられた肉体には迫力がある。

なまじ目標とする相手だからこそ、鷹羽と自分の体格差に少し気が滅入った。

斎とて身長は百七十五センチあるし、子供のころから家の方針で剣道だ柔道だと習わされてきたお陰で、それなりに筋肉はついている。それでも細身なのは、もう体質としか言いようがない。兄弟三人のうち、兄と弟は父親譲りのしっかりした身体をしていて、斎だけが母親に似たすんなりした作りだ。

ついでに顔も、どちらかといえば母親似だった。眉のあたりはキリとしているし、甘い顔立ちではないのだが、子供のころは女の子に間違われることもよくあった。それを避けたくて可愛げのないポーカークフェイスを身につけた、という面もあったのかもしれない。

——この外見のせいで、大学時代は苦労させられたっけな……。

「とりあえず、いまのところは荻嶋組との接触や裏稼業のほうの動きはないわけだな」  
鷹羽の声に連想を断たれる。

頷きを返しながら、鷹羽がなにか探るような眼差しでこちらを見ているのに気づく。

あまり見詰めるから、次第にムズムズと居心地が悪くなってくる。

「あの……なんですか？」

問いかけると、鷹羽が苦笑するかたち唇を歪めた。

「悪いが、もう少し細かい報告をしてもらっても構わないか？」

「細かくというと、どのあたりの報告をすればいいですか？」

奇妙な間が一拍空いたあと。

「もし、耿零飛にされたことがあったのなら聞かせてほしい」

「……されたこと、って」

「奴は若くて美形だの、肌が綺麗だのなんて愛人探しみたいなふざけた条件を通訳に求めた。そのうえで亜南が雇われたということは、合格ラインだったんだろう。その手のことを要求されることも考えられる。もし、なにかあったなら把握しておきたい。耿零飛は桁外れの容姿と財力を持った男だ。籠絡するはずが籠絡された、ということも起こりかねんからな」

要するに、自分が零飛に落ちることを危ぶまれているのだと、斎は理解する。

そんな浅はかな人間だと鷹羽に少しでも疑われているのかと思うと、無性に嫌な感情が湧きあがってきた。

「鷹羽さんのおっしゃるとおり、確かに耿零飛は並外れて恵まれた男です。でも、僕は外見や金銭などでは動きませんし、第一、相手は同性ですから籠絡されることはありません。ですから、細かい報告の必要はありません」

棘の混じる声で、斎はつらつらと答えた。

鷹羽の目が、ずっと細められる。

なにか、見透かされているような気がする……報告したくないことがあったのだと、読み取られている気がする。

「必要性のあるなしは、俺が判断する。正確に話してみろ」

しばらく拒絶の意を籠めて相手の目を睨んでいたが、強要する視線に従わざるを得なくなる。

軽く唇を噛んでから、斎は口を開いた。  
「耿零飛にとって僕はあまり趣味ではなかったようです。でも、素敵なキスをできたら雇うと言われたので、しました」  
無表情を装って淡々と告げると、鷹羽もまた事務的な口調で質問してきた。  
「そうか。どんなキスをした？」  
「……。唇を重ねて、ディープキスを求められている感じだったので、舌を入れました。でも、緊張してうまくできなくて。そうしたら、舌をきつく噛まれて、舐められました」  
こんな報告を真顔でしているのは、ひどく滑稽だ。滑稽だと思うのに、舌にその時の痛くて甘い感覚がありありと甦ってきていた。  
唇が離れたとたん、溢れた唾液。それが肌を伝う感触。  
たぶん、鷹羽も想像しているのだ。零飛と深く唇を重ねて舌を弄ばれている自分の情けない姿が、鋭い鳶色の瞳のなかに見える気がする。いたたまれない気持ちの波が心臓の鼓動を乱す。  
「気持ちよかったのか？」  
露骨な質問だった。  
そして、それが一番肝心な質問なのかもしれなかった。  
相手が同性で容姿や財力には惹かれなくとも、快楽に流されることはあり得なくもない。  
斎は鷹羽から目を逸らして、かすかに頷いた。沈黙が落ちる。夜の銀座を連なって走る車の騒音が聞こえる。苛立った、クラクションの音。  
椅子の軋む音がして、鷹羽が立ち上がった。緑灰色のカーペットを踏んで、ミニバーになっているボックスを開ける。  
「嫌なことを訊いて悪かったな」  
その言葉とともに、缶コーヒーを差し出された。思い出してしまったキスを消し去りたくて、斎はプルトップを開けると、甘みの強い液体を口腔に流し込んだ。大きく嚥下しては、またすぐに口に含む。それを何度か繰り返してから、口元を拭う。  
斎は、椅子に座ってブラックの缶コーヒーを傾けている鷹羽にきつい視線を向けた。「鷹羽さんは、耿零飛が愛人兼用の通訳を探していたと承知で、僕を選んだわけですね？ ……必要なら、あの男に抱かれろってことですか？」  
目標とする憧れの相手に、体よく活餌扱いされたのだ。  
さらにはこうして下卑た告白までさせられて、いつになく感情的になってしまっていた。

本文 p40～47 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>